# 『大乗荘厳経論』第6章第6～10偈について

## ――テキストの訂正及び「五道」に対する疑問――

岩　本　明　美

『荘厳経論』第6章第6～10偈は，『摂大乗論』入所知相分第四に『荘厳経論』の現観の五偈として引用され，800を越える『荘厳経論』の偈頌のなかでも極めて重要なものであり，つねに言及される箇所である。そこには，所取能取を否定する，いわゆる唯識観の実践が体系的に説かれている。ここではこれら五偈に関して，まずテキストを訂正し，次にこれら五偈に「五道」を配当する安慧の註釈の問題について考察する。

### 1　テキストの訂正

訂正を要するのは，第8偈 cd 句とその註釈箇所である。はじめに，Lévi 本第6章第8偈 cd 句及びその訂正テキストを提示する[1]。

【Lévi ed., p. 24, 1. 4】

dyayasya nāstitvam upetya dhīmān samtiṣṭhate 'tadgatidharmadhātau//

【訂正テキスト】

dvayasya nāstitvam upetya dhīmān saṃtiṣṭhate 'tadvati dharmadhātau//

第8偈 cd 句は，従来，Lévi 本に従って読まれてきた。しかし筆者はこのように 'tadgati を 'tadvati に訂正し，複合語にせずに dharmadhātau と同格とみなして，「智者は，二つ（所取能取）が存在しないことを知って，それらをもたない法界に位置する」と読むべきであると考える。

筆者がこのようにテキストを訂正するのは，写本，チベット訳，安慧釈に基づいている。Ns 本は 'tadgati のようにも読めるが，A，B，Na，Nb，Nc 本はまさに 'tadvati であり，Nx 本は意味をなさない 'tadoti である[2]。一方，チベット訳は de mi ldan pa'i (chos kyi dbyiṅs) であり，'tadvati の直訳であることを示している。また安慧釈からもこれと全く同じチベット訳が得られる[3]。

次に，この第8偈 cd 句の訂正に伴い，第8偈 cd 句に対する註釈箇所（Lévi ed., p. 24, ll. 15—16）も訂正されねばならない。現在，その箇所のテキストは，舟

橋氏によって次のように改められている（下線部分が訂正箇所）。

dvayasya câsya nāstitvaṃ viditvā dharmadhātau vyavasthānam atadgatigrāhyagrāhakalakṣaṇābhyāṃ rahita (evaṃ dharmadhātuḥ pratyakṣatām eti/)[4]

しかし，atadgatigrāhyagrāhakalakṣaṇābhyāṃ は，さらに，atadvati grāhyagrāhakalakṣaṇābhyāṃ に訂正されるべきであろう。この筆者の訂正は，A, B, Na, Nb, Nc, Ns, Nx 本の atadvati，及びチベット訳の de daṅ mi ldan pa'i (chos kyi dbyiṅs) によって支持される。

## 2　「五道」に対する疑問

『荘厳経論』第6章第6～10偈は，従来，おもに安慧釈に依って，資糧道・加行道・見道・修道・究竟道の「五道」という修行階程を端的に示したものとして解釈されてきた[5]。しかし筆者は，安慧釈を重視して五偈を「五道」の説示として解釈してしまうことには，疑問を感じている。その理由の一つは，五偈に「五道」を配当する安慧の註釈は二義的なものにすぎないと判断されるからである。

筆者が安慧釈をそのように判断するのは，まず第一には，世親が「五道」を配当して註釈していないからであるが，第二には，安慧の「五道」の配当には問題があるからである。今回は，この「五道」の配当の問題について，二点指摘する。第一点は，五偈に対する「五道」の配当の次第が整然としていないこと，第二点は，「五瑜伽地」に対する「五道」の配当と食い違いがみられることである。

では考察に入る前にまず，「五偈」に対して，安慧が「五道」をどのように割り振っているのか，及び世親がどのように註釈しているのか，確認しておく[6]。安慧は，第6偈 abc 句を資糧道に，第6偈 d 句と第7偈 ab 句を加行道に，第7偈 cd 句を見道に，第9偈を修道に，第10偈を究竟道に配当している。一方，世親が「五道」のうち註釈しているのは，見道と修道のみである。世親は，第7偈 ab 句を順決択分，第7偈 cd 句を見道，第8偈を法界の現前の仕方，第9偈を修道と註釈している[7]。

さて第一点。安慧の「五道」の配当は上記の通りであるが，安慧は，加行道に関しては順決択分の四善根位をも配当している。すなわち第6偈 d 句を煖位に，第7偈 a 句を頂位に，第7偈 b 句を忍位に，第8偈 (ac)c 句を世第一法位に配当している。ところがこの配当の次第は，実は整然としていない。第7偈 cd 句が見道なので，世第一法位は加行道から締め出された格好になっているのである。

この原因は，元来これら五偈が修行階程を順次示すことを第一目的として説か

れたものではないからであろう。世親は，五偈をひとまとめにして扱ってはいない。最後の第10偈は，第6章全体のまとめの偈に相当するもので[8]，「第一義の智の偉大さ」を説くものとして独立させ，残りは「顚倒を批判して，その対治である第一義の智に悟入することに関する四偈」としている。つまり第6〜9偈は「第一義の智への悟入」を説くことに主眼がおかれているために，第7偈 ab句で順決択分，第7偈 cd 句で見道が説かれたあと，修道へと進むのではなく，いわばもう一度順決択分に立ち返り，見道までが法界の現前の仕方という観点から見直されるのである。すなわち安慧は第6偈d句及び第7偈 ab 句に四善根位すべてを配当しきれなかったため，世第一法位だけは，法界の現前の仕方という観点から見直された箇所である第8偈 (ab)c 句に配当し，加行道から締め出された格好になってしまったのである。

では第二点。「五瑜伽地」は，『荘厳経論』第11章第42（, 43）偈に対する世親釈で説かれている (Lévi ed., p. 65, ll. 16—20)。そこでは表相 lakṣanā が「五種の瑜伽地」，すなわち 1. 持 ādhāra, 2. 作 ādhāna, 3. 鏡 ādarśa, 4. 明 āloka, 5. 依 āśraya として定義されているが，その五つに対して，安慧は順次「五道」を配当している[9]。そしてこの場合は「依」すなわち「転依」に「究竟道」を割り当て，配当に齟齬をきたしている。先の五偈のうち「転依」が説かれているのは第9偈であることが世親釈によって確認されるが[10]，その第9偈に安慧は究竟道ではなく修道を配当しているのである。もし，「五瑜伽地」における配当と整合性をもたせるのであれば，安慧は，第6章のまとめの偈である第10偈は除外して，第9偈に修道に加えて究竟道をも配当すべきだったのではないだろうか。

以上指摘した「五道」の配当の問題は，「五道」が二義的なあるいは便宜的な註釈にすぎないことを示していると理解されるであろう。安慧は五偈に対して，基本的には世親釈に沿った註釈をしている。また「五瑜伽地」と「五道」の等置も，「五瑜伽地」に対する註釈の最後に「要約すれば」とことわったうえで簡単に述べているにすぎないのである。

五偈に対する「五道」の註釈に関して，今回は，安慧釈の「五道」の配当の問題にしか立ち入ることができなかったが，さらに次のような二つの問題も考察されねばならない。

現在，「五道」があたかも『荘厳経論』の修行階程であるかのように理解されているが，実際には若干の例外を除いて『荘厳経論』全体において，「五道」のうち見道と修道以外のタームが用いられることはない。では『荘厳経論』の修行

階程はどのように記述されているのか。これが第一の問題である。

第二は，五偈によって五道が説示されていると理解するのではなく，むしろ五偈に対して「五道」を用いて註釈した結果，「五道」のほうが所取能取を否定する唯識観の実践構造を担ったと解釈すべきではないのか，ということである。

これら二点について検討を加えることを，今後の課題にしたい。

---

1) Lévi 本の訂正状況については，拙稿「『大乗荘厳経論』第14章世親釈 Skt. テキスト」(『禅文化研究所紀要』21，1995. 3) pp. (2)—(3) 参照。なお，筆者はそこで第14章について訂正を施している。

2) A, B, Na, Nb, Nc, Ns, Nx: 舟橋氏による略号（舟橋尚哉『ネパール写本対照による大乗荘厳経論の研究』国書刊行会，1985，pp. 16—20 参照)。

3) 『荘厳経論』無性釈にはこの箇所は引用されていない。また第8偈の『荘厳経論』波羅頗蜜多羅訳は，「心外無有物　物無心亦無　以解二無故　善住真法界」である。なお，『摂大乗論』チベット訳と玄奘訳は，長尾雅人『摂大乗論　和訳と注解』下（講談社，1987）に掲載されているテキストを，その他は，Osamu Hayashima, "Tatva, The VIth Chapter of the *Mahāyānasūtrālaṃkāra*"（『長崎大学教育学部社会科学論叢』32，1983）に掲載されているテキストを使用した。

4) 舟橋尚哉「『大乗荘厳経論』の考察—二利品・真実品を中心として—」(『印仏研』39-1，1990) pp. 42—43 参照。

5) 小谷信千代『大乗荘厳経論の研究』(文栄堂，1984) pp. 98—100 参照。

6) 五偈の和訳は，長尾前掲書 pp. 92—95 参照。なお，その注解において『荘厳経論』と『摂大乗論』諸註釈の「五道」の配当に関して検討が加えられているが，ここでは，『荘厳経論』世親釈と安慧釈に限定して論じる。それら諸註釈，さらに『阿毘達磨集論』等の初期瑜伽行唯識学派の諸文献をも含めた「五道」の考察は，今後の研究に譲らざるを得ない。ただし筆者が，「五道」を配当する『荘厳経論』無性釈を安慧釈を参照した著作であるとみなし（これに関しては別稿を予定)，『荘厳経論』漢訳の「五位」(五道）の記述を漢訳が時に示す後代のより進んだ思想の一つであると判断していることだけは明らかにしておく。

7) 早島前掲論文 (p. 42) に，第6章のシノプシスあり。

8) 『荘厳経論』各章の最後には，その章の総括としての偈が置かれることが多く，その場合韻律は必ず puṣpitāgrā である。この第10偈もまさにその puṣpitāgrā である。

9) Osamu Hayashima, "(Chos yoṅs su tshol ba'i skabs or) Dharmaparyeṣṭy (Adhikāra), The XIth Chapter of the Sūtrālaṃkāravṛttibhāṣya, Subcommentary of the Mahāyānasūtrālaṃkāra", Part Ⅱ (『長崎大学教育学部人文科学研究報告』27，1978) p. 109, ll. 11—16.

10) 『荘厳経論』第14章では，初地における転依（第29偈）と仏地における究極の転依（第45偈）とが説かれているが，ここは究極の転依である。

〈キーワード〉『大乗荘厳経論』，五道，五瑜伽地

(京都大学大学院)